

## 第七章 保証収入の心理的側面

本論は、保証収入の価値、危険、およびそれから生じる人間的問題といった心理的側面のみに焦点を合わせている。

この概念を支持する最も重要な理由は、これによって個人の自由が飛躍的に増大するであろうという<sup>(1)</sup>ことである。今日までの歴史において、人間の行動の自由は、二つの要因によって制限されてきた。すなわち、支配者による力の行使（とくに、従わない者の生命を奪う力）と、さらに重要な要因として、自分に課せられた労働と社会的存在の条件を受け入れようとする者は、すべて飢えざるをえな<sup>(1)</sup>いということであった。

(1) 『正気の社会』（社会思想社、三七四頁以下）において、〈普遍的生存保障〉について論じたので、参照のこと。

これらの条件を受け入れようとする者はだれでも、たとえほかからは何の力も加わらなくても、

飢えの脅威に直面したのであった。過去および現在の人間の歴史の大部分(資本主義下でもソ連でも)を支配してきた原理は、〈働かざる者は食うべからず〉であった。このおどしによって、人間は、要求されるとおりに行動するだけでなく、違った行動をする気さえ起こさないように考え、感じることを、余儀なくされたのである。

過去の歴史の根底にあるものが飢えの脅威であるという事実は、結局のところ、ある種の未開社会は別として、人間が経済的にも心理的にも欠乏生活をしてきたというところに、その原因がある。すべての者の必要を満たすに十分な物資のあることはかつてなかった。たいてい、わずかな〈指導者〉の集団が、心の欲するものをみな独占した。そして、食卓につくことのできない多くの者は、それは神の定めであるとか、自然の定めであると教えられた。しかし、この場合のおもな要因が〈指導者〉の貪欲ではなく、ものの生産性が低かったことであることを、忘れてはならない。

保証収入は、経済的に豊かな時代に可能となるものであって、人間をはじめて飢えの脅威から解放することができらるだろうし、それによって人間は真に自由となり、いかなる経済的な脅威にも左右されなくなるだろう。もしことわれば飢えるかもしれないというだけの理由で、労働条件を受け入れなければならぬ者は、いなくなるだろうし、才能や野心を持った男女が、違った職につくための準備として、新しい技倆を身につけることもできるだろう。女が夫から離れ、青年が家庭から離れることも、できるだろう。空腹を恐れる必要がなくなれば、人びとはもはや何も恐れなくなるだろう。(も

## 第七章 保証収入の心理的側面

ちろん、これは、自由な思想、言論、行動を妨げる政治的脅威も存在しない場合にのみ、言えることである。

保証収入は、スローガンとしてではなく、現実として自由を確立するばかりか、西洋の宗教とヒューマニズムの伝統に深く根ざした、へどんな人間にも生きる権利はある！という原理をも、確立するだろう。この生きる権利、食べもの、住居、医療、教育などを得る権利は、人間の固有の権利であって、いかなる条件によっても、社会的にへ役に立つ人間でなければならぬという条件によってさえも、制限されてはならない。

乏しさの心理から豊かさの心理への移りかわりは、人間の発達の最も重要な段階の一つである。乏しさの心理は、不安、羨望、自己中心主義を生む。(これは世界中の農民文化に、最も極端なかたちで見られる。) 豊かさの心理は、創意、生への信頼、連帯を生む。実際、いまだにほとんどの人びとが、心理的には、経済的に乏しい時代にふさわしい生き方をしている。ところが、産業化した世界は、今や経済的な豊かさの時代へ入りつつあるのだ。しかし、この心理的なへずれのために、保証収入という概念に示された新しい考え方を、理解することさえできない人が多い。というのは、伝統的な考え方は、ふつうかつての社会存在の形態から生まれた感情によって、決定されるからである。

保証収入によって、すべての人びとの労働時間は大いに短縮されるだろうが、そのうえに考えられる効果は、人間存在の精神的、宗教的問題が、現実的で避けられないものとなるということだろう。

これまででは、人は仕事に追われて（あるいは仕事が終われば疲れ果てて）、（へ人生の意味は何か）、（私は何を信じているのか）、（私の価値は何か）、（私は何ものか）などの問題に、真剣にかかわることができなかつた。仕事ばかりに追われることがなくなれば、これらの問題に真剣に取り組む自由が生まれるだろう。さもなければ、直接の退屈、あるいは代償行動に隠された退屈によって、半ば狂気となるだろう。

これらすべてのことから言えることは、経済的な豊かさは、飢えの恐れからの解放であって、人間社会から真の人間社会への移行のしるしであるということだろう。

この将来像の差引勘定をするために、保証収入の概念への何らかの反論、あるいは疑問を提起して見る必要がある。最も明らかな疑問は、保証収入が仕事への動機を弱めるのではないか、ということである。

すでに国民のますます多くの部分が仕事を失っているのです、そういう人びとには、仕事への動機の問題などは的はずれなのだが、それは別として、この反論はやはり重大なものである。しかしながら、物質的な動機が決して仕事や努力の唯一の動機ではないことは、証明できると思う。まず第一に、ほかに動機がいろいろとある。誇り、社会的評価、仕事そのものの楽しみなど。この事実は、例をあげるのにこと欠かない。最も明らかな例を示すなら、科学者や芸術家などの仕事がある。こういう人たちのすぐれた業績の動機となったものは、金銭上の利益ではなく、さまざまな要因の入りまじった

## 第七章 保証収入の心理的側面

ものである。なかんずく、やっている仕事への興味である。さらに、業績への誇りや、名声への願望もあるだろう。しかし、これは明らかな例のようには見えるが、十分な説得力を持つわけではない。というのは、こういうすぐれた人びとは、並みはずれた才能があればこそ、並みはずれた努力をすることができるのであって、それゆえに、ふつうの人間の示す反作用の例とはならない、と言えるからである。しかしながら、すぐれた創造力を持った人物のような並みはずれた資質に恵まれない人びとが、どういう動機で行動するかを考えてみれば、この反論が正しいとは思われない。あらゆるスポーツや、いろいろな種類の趣味の分野で、何の物質的な動機もないのに、どれだけの努力が払われていることか！ 仕事の過程自体への関心が、どこまで仕事の動機となりうるかは、メーヨ教授によって、ウェスタン・エレクトリック・カンパニーのシカゴ・ホーソン工場での古典的な研究において、はじめははっきりと示された。<sup>(2)</sup> 未熟練の婦人労働者が、被験者として、労働の生産性の実験に組み込まれたというまさにその事実、そして、実験に関心をいだいて、能動的に参加するようになったという事実の結果として、生産性は高まり、肉体的健康さえ増進したのである。

(2) Elton Mayo, *The Human Problem of an Industrial Civilization* (産業文明の人間的問題) 2nd ed. (New York: The Macmillan Co., 1946) 参照。

より古いかたちの社会を考えると、問題はいつそう明らかになる。プロシアの役人が、非常に安い

給料にもかかわらず、伝統的に有能で清廉であることは、よく知られていた。この場合は、名誉、忠誠、義務などの概念が、有能な働きの決定的な動機となったのであった。前産業化社会（中世のヨーロッパ社会、あるいは、今世紀はじめのラテン・アメリカの半封建社会など）を考えると、さらに違った要因が明らかになる。これらの社会では、たとえば大工は、昔ながらの自分の生活水準の必要を満たすだけのものをかせごうとするだけで、必要以上のものをかせぐためにもっと働くことは、拒否した。

第二に、人間は生まれつき怠け者であるどころか、何もしなければつらい思いをするというのは、事実なのである。一か月ないし二か月ぐらひは働きたくないと思うかもしれないが、大多数の人間は、たとえ無報酬でも働くことを望むものである。子供の発達および精神病の分野が、これに関する豊富なデータを提供してくれる。必要なのは体系的な調査であり、その中で、入手しうるデータをへ病いとしての怠惰の観点から組織し、分析して、さらに多くのデータを、新しい、関連した調査によって集めることである。

しかしながら、金銭がおもな動機にならないとしたら、仕事には技術的、あるいは社会的な側面において、何もしない不愉快さに打ち勝つだけの魅力と興味があればならない。現代の疎外された人間は、心底から退屈していて（ふつうは意識していないが）、そのために、能動性よりも怠惰にあこがれている。しかしながら、このあこがれそのものが、私たちの〈常態の病理〉なのである。おそら

## 第七章 保証収入の心理的側面

く、保証収入の濫用は、しばらくすればなくなるだろう。それはちょうど、金を払わなくてよい時でも、二、三週間で菓子を食べすぎがおさまるようなものである。

次の反論はこうである。飢えの恐れがなくなることが、ほんとうに人間をそれだけ自由にするだろうか。職を失えば飢えるという者だけでなく、楽な暮らしができるほどの収入のある連中だって、たとえば一年一万五千ドルの職を失うのは、やはり恐ろしいだろうから。この反論が正しいとすれば、保証収入は大多数の人たちの自由を増大するだろうが、中流、上流階級の場合はそうはならないということになる。

この反論の十全な理解のためには、現代産業社会の精神について考察しなければならない。人間は消費ホモ・コンシューメンス 費 人に変貌してしまった。貪婪で、受動的で、内的な空虚さを絶え間のない、ますます増大する消費によって補償しようとする。(憂鬱と不安への反作用としての食べすぎや、買いすぎや、飲みすぎの症例に、このメカニズムの臨症例が多く見られる。) たばこ、酒、セックス、映画、旅行、さらには教育、書物、講演、そして芸術を消費する。能動的で、興奮してゐるように見えるけれども、心の奥底では、不安で、孤独で、憂鬱で、退屈している。(退屈は、消費によって補償することのできるような類型の慢性の憂鬱症と定義できる。) 二十世紀の産業主義がこの新しい心理学上の類型である消費ホモ・コンシューメンス 費 人を生み出したのは、主として経済的理由、すなわち、大量消費の必要からであって、その消費は広告によって刺激され、操作されている。しかし、いったん性格類型ができ上がれば、

今度はそれが経済に影響を与え、ますます多くの満足を求めるといふ原理を、合理的、かつ現実的であるように見せるのである。<sup>(3)</sup>

(3) 問題をいっそう複雑にするのは、アメリカの人口の少なくとも二〇%が乏しい生活をしているということ、そして、これはヨーロッパのある部分、とくに社会主義諸国と同じであって、これらの国々でもまだ十分な生活水準に達していないといふこと、そして、ラテン・アメリカ、アジア、アフリカに住んでいて、人類の大多数を占める人びとは、ほとんど飢えに瀕しているということである。消費を減らそうという議論は、いつでも、世界の大部分では消費をふやさなければならぬのだという反論に会う。これはまったくそのとおりである。しかし、現在貧しい国々においてさえ、最大の消費の理想が人びとの努力の指針となり、彼らの精神を形成し、その結果、最適(最大限でなく)の消費段階に達してからも、その理想がなおも幅をきかせるという危険がある。

現代人は、ますます多くの消費への限りない渴望をいんでいる。ここから幾つかの結果が生まれる。もし消費に対する貪欲に限りがないならば、いかなる経済も、すべての人間の無制限な消費をまかなうだけの生産を近い将来においてなしえない以上は、消費<sup>ホモ・コンシューメンス</sup>人の性格構造が優勢であるかぎり、(心理学的に言って)真の(豊かさ)はありえないことになる。貪欲な人間にとっては、つねに欠乏状態が続く。いくら多く持っていて、これで十分ということはないからである。そのうえ、こういう人間は、ほかのだれに対しても強欲と競争心をいなく。そのために、本質的に孤独であり、おびえをいだいている。芸術やその他の文化的刺激を、真に楽しむことはできない。本質的に貪欲であるからである。このことの意味は、保証収入の水準で生活する人びとは欲求不満と無価値感をいだし、も



## 第七章 保証収入の心理的側面

っと多くかせぐ人びとは、依然として環境の囚人であり続ける、ということである。なぜなら、最大限の消費の可能性を失うことにおびえているからである。こういう理由から、最大限の消費の原理からの変革のない保証収入は、ある種の問題（経済的、社会的）だけは解決できても、当然あげるべき根源的な効果はあげないと、私は信じている。

それでは、保証収入を実行に移すために、何をしなければならぬのか。一般的に言えば、現在の体制を最大限の消費体制から、最適度の消費体制へ変えなければならぬ。その意味は――

個人的消費財の生産から、公共の使用財――学校、劇場、図書館、公園、病院、公共輸送、住宅

――の生産への産業の大規模な転換。言い換えれば、個人の内的生産性と能動性の発展の基礎となるものの生産に、重点を置くこと。まちがいなく言えることは、消費ホモ・コンシューメンス人の貪婪さが主として彼が

〈食べる〉（取り込む）ものの個人的消費にかかわっているのに対して、無料の公益事業の利用は、個人に生を樂しませながら、貪欲や貪婪を生むことはない、ということである。このように最大限の消費から最適度の消費へ転換するためには、生産様式の思い切った変革が必要だし、さらに、欲望をそそり、洗脳を行なう広告技術などを思い切って減らすことも必要である。<sup>(4)</sup>また、それに合わせて、思い切った文化的変革を行なうことも必要である。すなわち、〈組オガニゼーション・マン織人〉や操作された蟻塚（人口の密集した社の密集した社）の物質主義に対する、生命、生産性、個性などのヒューマニズム的な価値の再生である。

(4) 広告を制限し、さらには、生産を、公益事業に関するものをより多く生産する方向に向けるというのは、私の考えでは国

家の大幅な介入なしには考えられない。

これらのことを考えると、また新たな研究課題が生まれる。合理的必要と非合理的必要、よい必要とわるい必要を区別するための、客観的に妥当な規準はあるのだろうか。また、主観的に感じた必要は、どれも同じ価値を持つのだろうか。(よいという言葉の定義は、ここでは、人間の生命感、自覚生産性、感受性を高めるような必要のことであり、わるいというのは、これらの人間的可能性を弱めたり、麻痺させたりする必要のことである。) 麻薬中毒や、食べすぎや、アルコール中毒の場合は、皆がこういう区別をしていることを、忘れてはならない。これらの問題の研究は、当然次のような実際的な考察につながる。すなわち、個人の正当な必要の最小限度はどれだけか。(たとえば、部屋は一人に一室、衣料はいくら、カロリーはいくら、ラジオ、本などの文化的な価値を持つものはいくら、というふう) 今日のアメリカのように比較的物の豊かな社会においては、まともな暮らしの最小限の費用はどれだけか、また、最大限の消費の限界はどこに置くべきかを計算するのは、簡単にちがいない。一定の閾値を超えた消費に対する累進課税も、考慮の余地があるだろう。スラムを作らないことが重要だと思われる。以上をまとめて言えば、こうなるだろう。保証収入の原理に合わせて、最大限の個人的消費から最適度の個人的消費へと、社会を変貌させること、そして、個人的必要のための生産から公共の必要のための生産へと、思い切った移行を行なうこと。

## 第七章 保証収入の心理的側面

保証収入の考え方に、また新たな考え方を研究課題としてつけくわえることが重要だと思う。それは、ある種のもの<sup>1)</sup>の無料の消費という概念である。一つの例はパンであり、次いでミルク、野菜となるだろう。だれがどこのパン屋へ入ってもよく、好きなだけパンを取ってもよいという世の中を、しばらく想像してみようではないか。(パン屋が造ったパンには、国が全部の代金を払ってくれる。)すでに述べたように、貪欲な人間は、はじめのうちは食べきれないほど取るだろう。しかし、しばらくすれば、この〈貪欲型消費〉は安定して、人びとはほんとうに必要なものだけ取るようになるだろう。このような無料の消費は、私の考えでは、人間生活に新しい次元を生み出すだろう。(これがある種の未開社会における消費様式のずっと高度な段階での再現と見るなら、話は別だが。)人間は、〈働かざる者食うべからず〉の原理から解放されるだろう。この初歩的な無料消費でさえ、非常に新しい自由の体験となるだろう。経済学者でない者にとっても、皆に無料のパンを与える費用ぐらひは、容易に国が出せることは明らかである。それに応じた課税によって出費をまかなえばよいからである。しかしながら、さらに一步を進めることもできる。最低限必要な食べもの——パン、ミルク、野菜、くだもの——がすべてただであるだけでなく、最小限の衣類についても同様(何らかの方式によって、だれもが、たとえば一年に服一着、シャツ三枚、靴下六足を無料でもらえる)であるとしよう。さらに、輸送も無料なのだ。もちろん、公共輸送の方式を大幅に改善し、自家用車を費用のかかるものにする必要があるが。最後には、住宅問題も同じようにして解決できると考えられる。大規模な住宅

計画によって、子供たちの大きな寝室、年長者、あるいは夫婦のための小さな部屋を、希望者は無償で使うことができるのだ。こう考えると、保証収入の問題を解決するもう一つの方法は、すべての必要物の最小限の消費を、現金払いでなく、無料にすることではないか、と思われるのである。これらの最小限の必要物の生産は、高度に改良された公益事業とあいまって、保証収入の支給とまったく同じように、生産を続ける力となるだろう。

この方法は、ほかの学者たちが提案している方法よりラディカルなので、賛成しがたいという反論があるかもしれない。たぶん、それはほんとうだろう。しかし、一方ではこの無料で最小限の便宜が与えられるという方式が、理論的には現在の体制の中で解決できるのに対して、保証収入の理念は、多くの人びとにとって賛成しにくいものであることを、忘れてはならない。それは実行不可能だからではなく、へ働かざる者食うべからずの原理を捨てることへの心理的抵抗のためなのである。

いま一つの哲学的、政治的、心理的問題を研究しなければならぬ。それは、自由の問題である。西洋での自由の概念は、大部分が、財産を所有し、利用する自由に基づいていた。ただし、他の合法的な利権をおびやかさないかぎりにおいてはあったが。この原理は、西洋の産業社会においては、多くの面で現実的に破棄されてしまった。収奪の一形態である課税によって、また、農業、貿易、産業への国の介入によって。それと同時に、生産手段の中の私有財産は、巨大会社に典型的に見られる半公共財産へと、ますます移行しつつある。保証収入の概念はさらに国の規制を強めることを意味す

## 第七章 保証収入の心理的側面

るだろうが、今日では、ふつうの個人にとっての自由の概念は、財産（資本）を所有し、利用する自由よりは、何でも好きなものを消費する自由にあることを、忘れてはならない。好きなものをほんとうに選べるのは、成功した人間だけなのだが、もし無制限の消費を制限すれば、それを自由の侵害と考える人は、今日多いだろう。同じ商品の違ったブランドどうしの競争や、種類の違った商品どうしの競争によって、個人に自由があるかのような錯覚が生まれるが、実は、個人はそう望むように条件づけられたものを望むだけなのである。<sup>(5)</sup> 自由の問題への新しいアプローチが必要である。消費<sup>ホモ・コンシューメンス</sup>人を生産的で能動的な人物に変貌させることによって<sup>(5)</sup>はじめて、人間は商品の無制限な選択によってではなく、真の独立による自由を体験するだろう。

(5) ここでもまた、ソヴィエト・ブロック諸国での消費の全体主義的官僚機構化のために、消費の規制論の分が悪くなっている。

保証収入の原理に十全な効果を期待するためには、次のこととあわせて考慮しなければならない。

- (1) 消費習慣の変革、消費<sup>ホモ・コンシューメンス</sup>費 人の生産的、能動的（スピノザの言う意味での）な人間への変貌。
- (2) 新しい精神的態度、すなわちヒューマニズム（有神論、あるいは非有神論のいずれのかたちにせよ）のそのの創造。
- (3) 真に民主的な方法（たとえば、何十万もの対面集団が到達した決定を統合し、総合する新しい下院、各種企業に働くすべての成員の、経営への能動的参加<sup>(6)</sup>など）の再生。すべてを養う国が独裁者的な資質を持つ地母神的存在となる危険性は、あらゆる分野の社会活動におい

て、民主的な手続きを同時に思い切って増加させることによってのみ、克服できる。

(6) フロム『正気の社会』前掲部分参照。

要するに、保証収入の分野の経済的研究とともに、他の研究——心理学的、哲学的、宗教的、教育的——も行なわなければならない、ということである。私の考えでは、保証収入の大いなる一歩が成功するためには、他の分野における変革が伴わなければならない。忘れてならないことは、保証収入が成功するためには、全資産の一〇%を経済的に何の役にも立たず、しかも危険であるような軍備に使うことをやめなければならないということ、低開発諸国を系統的に援助することによって、愚かな暴力の拡大をやめなければならないということ、人口の急増を阻止する方法を見付けなければならないということである。これらの変革がなければ、未来のためのいかなる計画も成功しないだろう。未来はないからである。